

# 「世界+《私》」の海

—— フォークナーとモリスンの帰郷 ——

藤平育子

## 序 「世界+《私》」の文学

マルティニクの作家エドゥアール・グリッサン (Édouard Glissant) は、「フォークナーの作品はアフリカン・アメリカンによって再訪され命を与えられてこそ完全なものとなる」(Glissant, *Faulkner, Mississippi* 55) と述べ、トニ・モリソン (Toni Morrison) のその試みを高く評価している。1944年、フォークナーがマルカム・カウリー (Malcolm Cowley) に宛てた手紙において、「世界+《私》<sup>プラス</sup>を、あるいは《私》によって濾過された世界を……すべての人類の歴史を一つの文章にして表現してみたい」(Blotner, *Selected Letters* 185) と書いた南部作家の大望は、フォークナー文学が、1980年代にグリッサンによって注目されてカリブ海文学と繋り、《世界の響き》(Glissant, *Poetics* 93) として達成されたように思う。本稿は、フォークナーの『八月の光』(*Light in August*) とモリスンの『パラダイス』(*Paradise*) を中心に、今の時代を生きるわたしたちに開示される《世界の響き》を、流浪、境界、海、帰郷などの想像域を軸に辿ってみたい。

1944年、詩人で批評家だったマルカム・カウリーは、当時無名に近かったフォークナー文学を世に知らしめるエッセイを書こうとしてフォークナーと手紙のやりとりを始める。1944年10月29日付け『ニューヨーク・タイムズ』「ブック・レビュー」に掲載されたこのカウリーのエッセイ (“William Faulkner’s Human Comedy”) は、フォークナーの面白さを世に知らしめ、1946年の *The Portable Faulkner* の刊行に繋ることとなった。カウリーへの返信において、フォークナーは、同時代の南部作家で、その当時はすでに故人となってい

たトマス・ウルフ (Thomas Wolfe [1900-1938]) がしようとしたことを称え、さらに自分はウルフを超える作家になりたいという野望を語った。

トム・ウルフはあらゆることを言い、あらゆることを手に取ろうとしました。つまり、「世界+《私》 (the world plus 'I')」、あるいは「《私 I》」によって濾過された世界、あるいは彼が生まれ……歩き、死んだ世界を、一冊の本に包摂して《私 I》を書こうとしました。私はその一歩先を行こうと思っています……。私はそれらすべてのことを一つの文章で、つまり大文字とピリオドが一つしかない文章で言ってみたいと思っているのです……。つまり、私はすべての人類の歴史を一つの文章にして表現してみたいのです。(Blotner, *Selected Letters* 185, なお、「私」を表す英語 "I" の原文は、括弧つきで 'I' と表記される。)

フォークナーはこの手紙において、“the world plus 'I'” という言葉を用いて、自分のことを語りつつ世界のことも語りたいと願っている。私は、小説は基本的に「個人」の物語であると認識しているが、フォークナーは、その《私 “I”》をとおして、大きな世界のことを語りたい、と考えていたように聞こえる。それを大文字とピリオドが一つしかない一文に収めて書きたいと望んだ。かくして、フォークナーの長々しい文章と長々しいパラグラフは、世界と個人を繋ぎたいという小説家の野望を表わすための必然の文体として帰結したのである。

そのような難解で読みにくい作風にもかかわらず、あるいは、その難解さゆえにこそ、アメリカのみならず、世界の作家や研究者は、難解さの網目に絡め取られ呪縛され続けている。南米コロンビアの作家ガブリエル・ガルシア＝マルケス (Gabriel Garcia Marquez) は、ノーベル賞受賞演説 (1982年) において、フォークナーを「私の師匠」だと言い、エデュアル・グリッサンは、フォークナーのミシシッピを旅し、*Faulkner, Mississippi* (フランス語原書1995年) を書く。私が冒頭で用いた、《世界の響き》という言葉は、グリッサンによるが、グリッサンは、フォークナーの小説を、ボブ・マーリー (Bob Marley) の歌、シカゴの建築、エズラ・パウンド (Ezra Pound) の『カントウズ』 (*Cantos*)、リオ・デ・ジャネイロやカラカスのパリオ (スラム) の混乱、また、ソウエト

の小学生たちの行進, さらにはジョイス (James Joyce) の『フィンゲガンズ・ウェイク』 (Finnegans Wake) などとともに, 《世界の響き》 (écho-monde) と名づけている (Glissant, *Poetics* 93)。

## 1. トマス・サトペンの流浪と矢のノマディズム

フォークナーは, 故郷ミシシッピでほぼ生涯を過ごしたが, 作品においては, 故郷喪失者や孤児たちの流浪について執拗に描いている。以下, そのようなフォークナー文学における流浪について, そして, ホミ・バーバ (Homi Bhabha) をはじめとするポストコロニアリズムの批評家や理論家によってしばしば中心的に論じられるトニ・モリスンの文学に描かれる流浪 (dislocation, disorientation) と帰郷 (coming home, going home) について考える。

まず, エドワード・サイード (Edward Said) の『故国喪失者の省察』 (*Reflections on Exile* [2000]) の序文「批評と故国喪失」に書かれた文学研究への辛辣な叱責の言葉に耳を傾けたい。

現在では文学研究がふたつの相異なる, また私見では, ともにばかばかしいほど偏った方向に分裂している……。ひとつは, 専門家だけが使う術語を多用する方向であり, そこには戦略なり技巧なり特権なり価値付けなりの観点があふれかえり, その多くは言葉だけのもの, あるいは「ポストモダンの」であって, そのぶん世界との関わりが失われている。いまひとつは, みずからを「伝統的」学問と称する無味乾燥で現実逃避的で反知性的で擬似健康的な方向。歴史的経験, とりわけ強制移動や故国喪失や移住や帝国の経験は, それゆえ文学研究のこうしたふたつのアプローチを審問に付すだろう—過去200年のあいだ多様なかたちで人間存在を支配してきたにもかかわらず, 遠ざけられたり, 忘れられてきた現実をぶつけることで, こうした一般経験や特殊な経験こそ, 本書のなかで, わたし自身の批評や学術研究が復元し, 理解し, 位置づけようとするものに他ならない。(Said xxxi-xxxii)

このように, サイードは今こそ, 「歴史的経験, とりわけ強制移動や故国喪失

や移住や帝国の経験」を文学批評の視点としなければならない、と主張し、批評家の責任を問いかけている。

サイドは、同書において国境横断的に世界の文学を論じており、アメリカ文学では、トニ・モリスンをはじめとするアフリカ系文学を高く評価している。また、サイドは、同書収録の“Introduction to *Moby Dick*” (*Moby-Dick*, New York: Vintage Books, 1991) において、「帝国」「国家」「逸脱」「境界」という用語を用いて、*Moby Dick*は、「想定可能なもの……からつねに逸脱せずにはいられない人物 (Captain Ahab) について」(Said 359) 語っており、「この小説の進行は、ひとりの取り憑かれた個人の航跡を辿りつつも、また同時に、国家の航跡を辿ってもいるのだ」(同367) と論じている。さらに、「メルヴィル (Herman Melville) がアメリカの歴史と文化に脈々と流れる帝国のモチーフのようなものを、きわめて正確に捉え」(同364)、「人間の全歴史」(同368) および「世界史のヴィジョン」(同369) を示したと賞賛している。

ピークオッド号がヨーロッパの帝国規範からのアメリカの逸脱を表象していると同時に、犯罪者……である船長その人は、アメリカの逸脱からも逸脱せざるを得ない、アメリカ的逸脱そのものということになる。……ピークオッド号の乗組員はまったく異なる個々人であると同時にアメリカの人種、階級、宗教の代表でもある。この小説の進行は、ひとりの取り憑かれた個人の航跡を辿りつつも、また同時に、国家の航跡を辿ってもいるのだ。(同366-67)

サイドの議論に依拠するなら、南部という古い土地、故郷のミシシッピでほぼ生涯を過ごしたフォークナーも、ホームレスや孤児の放浪、ホームを探す旅を描く過程において、登場人物たちの取り憑かれた航跡を辿りつつ、国家の航跡を辿っていると読むことができよう。

『アブサロム、アブサロム!』(*Absalom, Absalom!*) の冒頭部分において、馬に跨り、マルティニク出身のフランス人建築家と、20人の「野生の黒人」(Faulkner, *Absalom* 4他) を引き連れて、ミシシッピの土地に侵入してくるトマス・サトペン (Thomas Sutpen) のイメージは、征服者のそれである。しかも、

未開の土地ミシシッピへ侵入し、そこに農園を建設しようとするサトペンの企みは、遠く植民地時代に、ヨーロッパからキリスト教と文明、そして武器を携えて新大陸にやってきて、ネイティヴ・アメリカンの土地に住み着いたアメリカの祖先たちの、強い征服者のイメージと重ねられる。

グリッサンはこれを征服者特有の「矢のノマディズム」(Arrowlike nomadism) と呼び、「矢のノマディズムは定住をめざす破壊的欲望にはかならない」(Glissant, *Poetics* 12) と述べている。矢のノマディズムにおいては、大地との関係は「略奪的」(同)なものとなる。

ところが、その征服者トマス・サトペンの過去を辿ると、「スコットランド系イギリス人の血を引く貧乏白人」(Faulkner, *Absalom* 305)であり、彼の祖先は、ロンドンの中央刑事裁判所、オールド・ベイリー (Old Bailey) から植民地のジェイムズタウンに送り込まれた(同180) 犯罪人だったことが語られる。つまり、サトペンの祖先は、罪人であったがゆえに、祖国スコットランドから強制的に引き剥がされ、新しい土地で強制労働をさせられていたのである。

サトペンの少年時代が語られるところを聞く限りでは、ヴァージニアの山中でも、東部海岸地帯のタイドウォーターに降りていってからも、彼の一家は極貧のうちに過ごしていることがわかる。このタイドウォーターへの山下りも2年ほどかかっているようで、降りる途中で、サトペンの姉が結婚もせずに2人の子供を産んだ、と語られている。このあたりのサトベン一家の移動、流浪の過程は、とても侵略的とは言えず、矢のノマディズムとは程遠い。

そのようなサトベンが12年後に侵略者としてミシシッピに乗り込んでくるきっかけとなったのが、少年サトベンが、タイドウォーターの白人農園主の邸宅で、黒人召使から受けた侮辱だった。そこで、サトベンは、いかにも貧乏で無力な自分に初めて気づかされ、森に入って、農園主の立場にまで上り詰めるにはどうすればいいのか、について考え、そのあと貧しい住処へ帰る場面が、彼の目覚めを衝撃的に語っている。

彼は家のことを考え始めた。家か、はじめのうちは笑おうとしたと思い、そしてもっと事情が飲み込めたあとでもやはり笑うしかなかったと思った、森

から出て、まだ隠れて見えてはいない家に近づいていった、やがて家を見た一粗雑でところどころ腐った丸太の壁、垂れ下がっている屋根、屋根板がなくなっているところもそのまま取り替えることもせず、鍋とかバケツを置いて雨漏りに対処していた……（同190）

上記引用文において、「家」と訳した箇所の原文は、イタリックスで大文字の“Home”と表記されている。サトベンは生まれて初めて自分が置かれた生活の貧困と悲惨に気づく瞬間である。彼はその「家」と呼んだ場所で、「自分の姉が庭の洗濯桶の上でリズムカルに足を動かして洗濯している」（同190）のを見る。ほんの1行で描かれる、洗濯桶の中で、姉がおよそ無邪気に足で洗濯物を踏んでいる光景は、読者に容易に見落とされがちな場面だが、これほど涙ぐましい洗濯の場面、つまり女の貧困が描かれている場面は、フォークナーの作品では珍しく、サトベンの出自が、富裕層によって搾取される側の貧乏白人フア・ホワイトであることを如実に物語っている。

その直後、サトベンは、この家とは言えないような家を出て、一攫千金の機会があると学校で習った、西インド諸島のハイチに向かう。このように、サトベンの流浪の旅は、極貧の暮らしから脱出し、やがて富を得て征服者になるための流浪であり、そのゴールには、定住と大邸宅の建設があった。つまり、サトベンは西インド諸島に船出することによって、グリッサンの言う「矢のノマディズム」を実践する人物となる。

## 2. ジョー・クリスマスの流浪と帰郷

それではここで、定住をめざすサトベンの「矢のノマディズム」とは異なる、侵略も定住も目指さない流浪を続ける人物、『八月の光』のジョー・クリスマス（Joe Christmas）について考えてみよう。本論のテーマである「帰郷」について、クリスマスがなぜミシシッピに戻ってくるのか、という単純な疑問から考えてみるができる。『八月の光』は、これまで、1932年出版当時のアメリカ南部におけるジム・クロウ政策と黒い血への恐怖を描いているという議論

が多くなされてきた。<sup>1</sup>しかし、本論では、南部の「恐怖」や「不安」を象徴するクリスマスを改めて検証するのではなく、彼自身が、メンフィスの白人専用の孤児院で「ニガー」と呼びならわされていた時から、どのような心理状況を抱えて、いくつもの犯罪に関わるのか、そして、なぜ彼は放浪先にとどまることをせずに、15年後の33歳の時にミシシッピに戻ってくるのか、について考えてみよう。

まず、クリスマスは18歳の時、ミシシッピ州の田舎町で養父マッケカーン (Simon McEachern) を殴り倒し、おそらく死亡させたと考えられている。それなのに、流浪生活を15年間続けたクリスマスが、なぜ養父殺害現場から15マイルほどしか離れていないジェファソン (Jefferson) の町に立ち寄り、たまたま侵入したジョアナ・バーデン (Joanna Burden) の屋敷の、元奴隷小屋だったところに3年も寝泊りするのか。

マルティニク出身の詩人でのちに政治家としても長年活躍したエメ・セゼール (Aimé Césaire) に『帰郷ノート』という「テーマ詩」(アンドレ・ブルトン [André Breton] による序文参照)がある。セゼールのネグリチュード (黒人としての遺産) 礼賛のこの「テーマ詩」は、マルティニクに戻ろうと決めてから、その頃住んでいたパリで書かれた。植民地住民の悲惨と一握りの人たちによる搾取、そして島の人たちの諦めを想像して、セゼールは激しく心を引き裂かれていた。マルティニクは、1635年にフランス支配になり、2010年1月に大地震に見舞われたハイチなど、ほかのカリブ諸島と同じように、コロンブス以来、ヨーロッパが生み出してきたすべての矛盾が詰め込まれていると言われている。ちなみに、『アブサロム、アブサロム!』において、トマス・サトペンが屋敷建設のためにミシシッピに連れてくる「フランス人建築家」と呼ばれる人物は、マルティニク出身とされている。

また、のちにセゼールの「ネグリチュード」という概念の限界をただすようにして、同じマルティニク出身のエデュアール・グリッサンらによる「クレオール性礼賛」へと発展していく。セゼールの「帰郷」には、懐かしいホームに帰るという期待の気持ちより、植民地の悲惨と矛盾に立ち向かっていく緊張、さらには、自分を奮い立たせる激しい意気込みが感じられる。一見したところ、

セゼールの帰郷は、クリスマスがミシシッピに帰ってくることはおよそかけ離れているように見える。しかし、植民地マルティニクの現実に関心をもち裂かれていたセゼールと並べるなら、クリスマスもまた、アメリカ南部の人種主義的「ジム・クロウ政策」によって引き裂かれた人々の黒い血への恐怖を体現するために宿命的な緊張感を持ってミシシッピへ帰るのだと思えてくる。とくに、ジョアナ・バーデン殺害後、1週間の逃亡を経たのちに、モツタウン（Mottstown）街頭で堂々と逮捕される時、クリスマスには南部の悲惨と矛盾に立ち向かっていく覚悟ができていく。

クリスマスの流浪の旅—15年間続いた通りを走る旅—は、「オクラホマ、ミズー、そして遠くメキシコまで南下し、それから再び北部へ向かい、シカゴとデトロイトへ、そして再び南部に向かい、ついにミシシッピに戻る」（Faulkner, *Light in August* 224）のである。「ある午後、通りはミシシッピの田舎道になった。彼はその町の名前を知らなかったが、名前などどうでもよかった」（同226）と語られる。このようにクリスマスは、ミシシッピへたまたま立ち寄ったのではなく、かなり意図的に、あるいは宿命的なものを感じて、帰って来るのだと考えられよう。

『八月の光』2章冒頭において、製材工場に仕事を探しに来たクリスマスについて、バイロン・バンチは、「professional hoboには見えなかったが、決定的に根無し草（rootless）のようなところがあり、町も都市も通りも壁もいかなる大地の一角も、その男のホームではないかのように見えた」（同31）と述べている。

また小説後半において、クリスマスの祖父ドク・ハインズ（Doc Hines）は、クリスマスは、孤児院でほかの子供たちから「ニガー」と呼ばれて育つ、と語っている。クリスマスは、孤児院の黒人の庭師に、「僕はニガーじゃないよ」と主張する。すると、庭師は、「おまえはそれより悪いんだ。おまえは自分が何者かわかっていない。それにもっとひどいことに、おまえには決してわからないのさ。おまえはこれから生きて、そして死んでからも決してわからないのさ」（同384）と言う。クリスマスにとって、この庭師の言葉は、ほかの孤児仲間から「ニガー」と蔑まれて呼ばれていたことよりも衝撃的なトラウマとな



る。なぜなら、クリスマスはすでに「おまえは何者にもなれない」と決めつけられてしまったからである。

フォークナーは、のちにヴァージニア大学のクラス・コンファレンスで、クリスマスは「自分が何者かわからなかった、ですから彼は存在していなかった (nothing) のと同じなのです。……そこが彼の悲劇なのです」(Gwynn and Blotner 72) と応え、引き続いてフォークナーは、「彼は自分自身を人類 (the human race) から故意に追放しました、自分がどちらなのかわからなかったからです」(同) とまで言っている。クリスマスは自分が何者かわからなかったというのは、すなわち黒人なのか白人なのか決める決定的な証拠がなかったというだけの話だが、それは南部の小さな共同体にあっては、人間であるかどうかを決めるほどの重要な問題だったのである。

クリスマスは、その「羊皮紙色の肌」(Faulkner, *Light in August* 120 他) によって、一見したところ、白人に、せいぜい外国人に見える。しかもクリスマスは、ルイジアナ州のプレッシー対ファガスン (Plessy vs. Ferguson) の訴訟において、最高裁から「分離すれども平等」(“Separate but Equal”) と主張する判決が出た1896年生まれと設定されているので、南部のジム・クロウ政策が確実に厳しさを増す宿命の年に生まれたことになる。

クリスマスは自分の中の疑わしい黒さについて、「黒い血を持っているかもしれない」(同196) と黒い血の可能性を口走っただけで、最初の恋人ボビー (Bobbie) にも、「ニガー」(同218) だと断定されて捨てられる。フォークナー自身が語ったように、ジム・クロウ政策下の南部では、「ニガー」と呼ばれることは、nothingだと言われることと同じだった。

このような状況から考えるなら、クリスマスは、nothingではなく、何者かとして認知してもらうために養父を殺害し、ジョアナを殺害し、おまけに逃走中にリヴァイヴァル・ミーティングを行なっている黒人教会も襲撃し、自分の居場所を教えているのではないかと思えてくる。

メンフィス (Memphis) の孤児院で、栄養士の部屋に侵入して菌磨き粉を食べて吐きそうになった時、カーテンの向こう側で栄養士とインターンが、子供にはわからない行為をしていた。その現場を密告されることを恐れた栄養士

は、クリスマス黒人と決めつけて、マッケカーン家に養子に出すための画策を練る。この時クリスマスは5歳だが、歯磨き粉を吐き戻し、「完全に受身的に降参して、『僕はここだよ』」(同122)と心の中で叫び、知らせようとする。さらに、孤児院において、自分の居場所を知らせて降参するこの構図は、クリスマスが今後自分を追い詰めていく儀式としての様相を帯びてくる。

また、ジョアナ・バーデンの殺害にしても、死体を発見する人たちが見るおぞましい死に様を計算しているかのように、まるでペルセウス(Perseus)がメデューサ(Medusa)の首を切り落としたのに似て、ジョアナの男性的支配を罰する儀式のように、斬首のかたちで行なわれる(同287-88参照)。

クリスマスは、ジョアナを殺害したあと1週間逃走するのだが、逃走中に、リヴァイヴァル・ミーティングを行なっている黒人教会を襲撃し、会衆の一人を殴って説教壇に立ち、神を呪う(同324)。さらにクリスマスに立ち向かうロズまでもベンチの脚で殴り、頭蓋骨を割ってしまう。クリスマスは、なぜ黒人教会で多くの会衆が見守るなか、このような暴力を振るい、神を呪い、大笑いをするのだろうか？ 18歳の時の養父殺害(あるいは傷害)は、学校の校舎で多くの若者がダンスパーティをしているさなかに起こり、しかも、「やった！ やった！ 前からいつかやるって言ってたじゃないか！」(同207)と豪語している。

クリスマスは危険分子として自分を露出させることによって、まるで、早く捕まえてほしいと居場所を教えているように見える。養父マッケカーン襲撃から15年後にミシシッピに辿り着くまでにクリスマスは、「労働者、鉦夫、土地投機人、賭け事の予想屋」(同224)などに携わり生計を立てている。また、「軍隊にも入隊して、4ヵ月いて脱走したが、捕まらなかった」(同)とあるのも意味深く読めるだろう。クリスマスは捕まるために軍隊に入り、脱走もしたのに捕まりもしなかったことに、むしろ自分の存在を消されていくことへの不安を感じたのではないかと私は考えてみたい。

### 3. 無ではなく何者かになるクリスマス

クリスマスは、ジョアナ殺害後、逃走の途中で出会った人たちは、きっと自分のことに気づいた (They recognized me.) に違いないのに、なぜまだ逮捕されないのか? と訝っている場面がある (同337参照)。自分が「ここにいるよ」という振りをすると、皆がすぐに逃げていってしまうのはなぜなんだろう? まるで自分を「捕まえるのにルールがあって、そのルールどおりに捕まえる時が来ていないというふうじゃないか」(同) と考えるのである。

しかし、クリスマスは、「もう疲れた」と自分の命の終りを見つめた時、初めて、そしてきっと最後に「自分が生まれた大地 (his native earth) をあらゆる様相において見てみたい」(同338) と願うことができるのである。この大地は、クリスマスが不本意ながら育てられた養父母の家があった場所に近いのだが、native earthとは、そのような限られた地理的な場所ではなく、もっと大きな地域、つまりアメリカ南部の土地と習慣のことを言っているのではないだろうか。なぜなら、クリスマスは、「その土地の強制するところ (compulsions) によって……造られて……その田舎で青年 (manhood) になった」(同) と回想しているからだ。

クリスマスは、土地が強制するものを体に浸み込ませられて自分が大人になった、その大地をあらゆる様相において見る時、初めて、「心の平安と静けさと急がなくてもいい (peace and quiet and unchaste)」(同338) を感じることができる。クリスマスはこの瞬間、故郷に帰ったことを実感して安堵していると考えられよう。つまり、それは故郷南部の強制するものをゆっくりと見て、自分を生み育ててくれた大地と「ジョイン (join)」<sup>2</sup>する時なのだ。クリスマスはジョアナ殺害から1週間の逃走にうちに、過去30年間で走ったより遠くまで旅した、それでもまだ「円 (circle) の内側にいた」(同339) ことに気づき、ついに南部の強制するもの、南部の掟に則った終わり方を意識している。

こうしてクリスマスは、多くの人々の眼差しのもとで、ジェファソンの右翼の人種主義者パーシー・グリム (Percy Grimm) によって去勢され惨殺されるが、この瞬間に初めてクリスマスは、ジェファソンの人々にとって決して忘れられ

ない「何者か」になることができるのだ。クリスマスの死の瞬間の描写は、おそらく『八月の光』でもっとも美しい劇的な場面となっていると思われる。クリスマスは、勝利の微笑みすら湛えて、人々の罪悪感の記念碑として、「天に昇るロケットのように火花を発射して」立ち昇り……人々は、今後どのような平和な時にあっても、クリスマスの死を「決して失うことはないだろう」（同465）。このようにしてクリスマスはその死にゆく身体を人々の眼差しに焼きつけることによって、人種主義の偏狭に閉じ込められた南部共同体の人々の記憶を「永遠に、永遠に（forever and ever）」（同465）支配することができるのだ。

クリスマスの死は、その立ち昇るイメージによってキリストの十字架刑に重ねられ、彼のミシシッピへの帰郷は、南部人種主義の贖罪の儀式に供された南部の息子となるためだったと考えることができよう。

ここで、出会った人たちが「自分を認知した（They recognized me）」というクリスマスの言葉にもう一度、注目してみよう。『八月の光』2章において、クリスマスが製材工場に仕事を探しに来る場面（1930年）から読者に紹介され始め、この時彼は「放浪者（tramp）のようであり、そうでもなく……ただ決定的に根無し草でホームレス」（同31）として映る。この小説の大半は、この時点から過去に遡るようにして、クリスマスの生涯が語られるが、彼の誕生（同373）から孤児院までの3ヵ月について語られるのは、かなり終りに近い15章において、しかも祖母ミセス・ハインズ（Mrs. Hines）によってである。祖父母が住んでいたモッツタウンでクリスマスという男が逮捕された、と聞いて、祖父ユーフィアス・ハインズ（Eupheus Hines）は、「やつを殺せ！ 殺せ！」と発狂したように言い続ける。そこでミセス・ハインズは、30年以上の時間を取り戻すようにして、「あんた、ミリーの赤ん坊をどうしたの？」（同348）と夫に問いただす。祖母は、町で逮捕された男はきっと、夫から「死んだ」と言われていた孫なのだと思います、ジェファソンへ護送されるために、ふたりの保安官に挟まれて歩くクリスマスの顔をじっと見る（同356参照）。祖父母はジェファソンへ向かい、ミセス・ハインズは自分が祖母だと名乗り、クリスマスの父親が、メキシコ人のサーカス・マンで、黒人だったかもしれない（同374参照）、と語る。こうしてクリスマスは、ようやく祖母に認知され、パーシー・

グリム率いるリンチ隊に虐殺された彼の遺体は、祖父母の住むモットタウンへ送られることになる。

#### 4. 「認知の文学」—『ビラヴィド』と『パラダイス』

ホミ・バーバ (Homi Bhabha) は、*The Location of Culture*において、今日の文学は、“Literature of Recognition”だと論じて、トニ・モリスンの『ビラヴィド』(*Beloved*)を取り上げて雄弁に議論を展開している。ディアスポラと難民が世界中に散在する今日、失われた個人を誰がどのように、誰だと認知できるというのだろうか？ 歴史の中に無名のまま消えた人たちが、抑圧された記憶のかけらとなって生き残った人たちを襲う時、どのようにして「認知」が可能だろうか？ それが小説となったのが、『ビラヴィド』だった。『ビラヴィド』は、母が殺した娘を「認知」し、あの世から橋を渡ってこの世に帰還した娘が、自分を殺した母を、そして、母は手にかけた娘を認知する物語として読むことができる。

ジョー・クリスマスは孤児院に捨てられた孤児だが、『青い眼がほしい』(*The Bluest Eye*)に始まるトニ・モリスンの小説には、孤児、流れ者、ホームレスが必ずといっていいほど登場する。19世紀の終り、ミシシッピとルイジアナの農園を追われた漆黒の肌の黒人たちは、肌の黒さと貧困ゆえに白い黒人たちに入植を拒絶されるが、流浪の末に19世紀末、ヘイヴン (Haven) という町を建設する。さらに、1949年、ネイティヴ・アメリカンから提供された土地に、ルービィ (Ruby) という新しい町を建設する (Morrison, *Paradise* 194)。町の父祖たちは、余所者を「敵」とみなし、異なるものを忌避し、民族の相同性によってのみ町を維持しようとしていた。黒い黒人だけの町建設は、新大陸アメリカにやってきて、ネイティヴ・アメリカンから土地を奪って白人の町を築いたヨーロッパ人、そして、『アブサロム』のトマス・サトベンの行為と重なる。それは、定住のための流浪、つまり「矢のノマディズム」の一例と見なしようだろう。

いっぽう、ルービィの17マイル北に位置する女子修道院は、インディアン

同化政策のための学校（1925年）となり、インディアンの子供たちにインディアンに固有の文化と言語を忘れさせる教育をしている。このようにして、モリスンは、『パラダイス』において、漆黒の肌の相同性において結束した黒人共同体とインディアン・スクールとしての「修道院」を設定することによって、被抑圧民族の文化の奪取という、きわめてアメリカ的な繰り返しを、抑圧する主体として、白人化教育を行なう修道院だけではなく、アメリカ史において犠牲者だったはずの黒人グループを破壊的な征服者として描いている。

その女子修道院には、9歳の孤児だった時、南米のスラム街で「誘拐」（同223）され、「盗まれた（stolen）」（同224）コンソラータ（Consolata）が住んでいる。その「緑色の眼」と「紅茶色の髪」（同223）によってコンソラータが南米インディアンの出身であることが明らかになるが、彼女はやがて母国語の基本を忘れてしまう。母国語を忘れるコンソラータは、白人への同化教育を施されるインディアンの子供たちとホームの喪失を共有し、さらには、ルービィ（1968年現在の人口は360）の人たちとも、喪失や拒絶、ホームレスなどの境涯において、根っこでつながっている。ところが、1976年7月、9人の男が武装して、女子修道院を襲撃し、全米各地から傷ついて流れ着き、ともにコミュニケーションを形成しつつ暮らしていた女性たち5人全員を殺してしまう。ルービィの男たちは、強固な父権制を強引に維持し、町の女性たちが、自由や解放へと眼を向けるのを恐れ、女には不要な自由や解放を刺激したのは修道院の女たちだと決めつけて、彼女たちを処罰するのである。

コンソラータがルービィの男たちに襲撃されて殺されると予感するその時、コンソラータを迎えに来る故郷の男性の幻に出会う。コンソラータは最初、この見知らぬ男性が誰であるか気づくことができない。「遠い国（far country）から来た」と話す男は、コンソラータと同じ「紅茶色の長い髪が肩にかかり」、「新しいりんごのような緑色の眼」を持ち、「カウボーイ・ハットをかぶり、白いシャツにグリーンヴェスト、ぴかぴかの黒の靴、なめし皮のズボンの両脇に赤のサスペンダー」（同251）をつけており、そして、祖国で話される英語で話した（同252）のである。「おまえに会いに来た」（同）と男に言われて、コンソラータはここで、故郷の人に見つけてもらい、認知される。それは、『パ

ラダイス』のほかの故郷喪失者たちと同じように、コンソラータが、「むかし故郷から連れ去られたけれど、やっと見つけてもらえた（“I once was lost but now am found.”）」（同212）と、啓示的に知る瞬間となる。

バーバは、ピラヴィドを奴隷の全体に吸収して総体化せずに、ピラヴィドという個の中に世界を見出した。バーバは、「今日、移住者、植民地化された人々、政治難民—これらの人々の境界上の状態、またフロンティア状態—こそが、世界文学の領域となるだろう」、さらに、世界文学は、一国文化の「主権」なり、人間文化の普遍性を問うのではなく、「モリスンやゴーディマ（Nadine Gordimer）の〈アンホームリイ〉（unhomely）な小説（領域からはみ出た、文化の交差地帯の物語）が表象する〈社会からはみ出て文化的にも排除された人々の物語〉に焦点を置く」（Bhabha 12）と述べて、『ピラヴィド』を、アメリカ文学ではなく、そのような「世界文学」のテキストとして位置づける。

いっぽう、エデュアル・グリッサンは、フォークナーの世界を「フロンティア」（227）として捉えている。ミシシッピが、そしてヨクナパトーフ郡がフロンティアである理由は、フォークナーが再現しようとしていたこの場所が、「動き、ためらい、過渡期、不確かなアイデンティティ、可能性と不可能性がごっちゃになってしまう魔力から逃れられない真実」（movement, hesitation, transition, uncertain identities, and truths that cannot escape the charm of the possible and the impossible all mixed together）（Glissant, *Faulkner* 228）を引き起こしてきたからである、と説明している。フォークナーの世界がフロンティアの表象であるからこそ、グリッサンは、フォークナー文学に《世界の響き》を聞いているのだ。つまり、グリッサンは、フォークナーをアメリカ文学というより、フロンティア文学あるいは《世界の響き》の領域に位置づけているということになるだろう。

トニ・モリスンを論じるバーバは、もっとも説得力ある一節において、次のように論じている—「奴隷のセサを通して子殺しの物語を再構築する時、我々の倫理的判断の歴史的根幹そのものが根本から修正を迫られる」（Bhabha 11）。なぜなら私たちは、殺さなければ連れていけない「安全な場所」の意味に攪乱させられるからである。バーバはさらに、モリスンを論じる際の「批評

家の政治的責任」について言及し、「批評家は、歴史的現在につきまとう、言葉では語られなかった、表現し得なかった過去のできごとを完全に現前させ、責任をとらねばならない」(同)と明言している。つまり、個人の外傷的心理の物語が政治的問題の根幹にあるがゆえに、奴隷の母による子殺しという19世紀の物語に、「移民」、「ディアスポラ」、「複数のアイデンティティ」など現代世界の状況を読み取ることが批評家の責任となるのだ。

母に殺された娘ピラヴィドは、300年にわたって中間航路の海で絶命した奴隷貿易の犠牲者たち全体を表わす総体から、一人の娘、一人の姉、一人の女として個を取り戻す人物である。ピラヴィドは全体の中の一人ではなく、彼女一人の個の中に歴史を、世界を表象していることになる。バーバの言葉によれば、ピラヴィドの顕現において、私たちは、「個人の出来事はそのまま政治的であり、家の中に世界がある」(同)ことを知らしめられる。

同様に、私たちは『パラダイス』の孤児コンソラータにも世界を見出すことができる。コンソラータは、南米からインドの服装で、母国の言葉によって彼女を迎えに来た使者に出会い、ようやく故郷への帰還を果たすことができるからだ。殺戮のあとで、コンソラータは、南米の海辺で、黒いマリア、ピアダーデに抱かれている。この海こそ、コンソラータの究極の故郷であり、パラダイスの表象として受けとめることができる。

## 結論に変えて—「ジョインする」場としての海

モリスンの『ピラヴィド』において、18年前に母によって殺され、あの世から20歳の娘の幽霊となって帰ってきたピラヴィドは、ようやく「帰郷」を果たすと考えられるのだが、母が娘を、娘が母を、妹が姉を認知したとき、3人して心の内側を言葉に出して語るところがある。ピラヴィドは言う。

わたしは死んだ……でもわたしは母さんの顔……わたしはひとりぼっち……わたしはふたりになりたい……わたしは死んではいない……わたしはジョインする時がほしい……母さんの顔はわたしに微笑みかけるわたしの顔



……わたしはジョインできる (Morrison, *Beloved* 213)

すでに述べたように、『八月の光』のクリスマスは、生まれた南部の大地を見つめ、大地とジョインするがごとくにして、帰郷を果たす。ホミ・バーバは、「帰郷」という言葉こそ使っていないが、ピラヴィドは、「もう心がホームレス (homeless) にならないようにセサのもとに帰ってきた (return) 娘」(Bhabha 17) であり、「デンヴァーのもとに帰る姉であり、逃亡の途中で死んだ父の帰還 (return) の希望を妹に持たせる姉である」(同)、また「彼女は殺人を犯すほどの愛から生まれ、愛と憎しみのもとに帰り (return) 自由になった娘である」(同)と説明している。

『アブサロム』の祖父コンプソンは、「か細い脆い糸」としての「言葉」を通して、「密かで孤独な人間たちの暮らしの表面の小さな角や縁が、時々一瞬だけジョインすることがある……」(Faulkner, *Absalom* 202)と述べて、言語の力は、孤独でホームレスの人間を「ジョイン」させることができる手段であると言っている。

1992年ノーベル賞受賞者のカリブ (アンティル島セントルシア) の詩人、デレク・ウォルコット (Derek Walcott) は、「海は〈歴史〉だ」<sup>3</sup>と詠んだが、ホームレスの子供たちが、母と妹と家族とジョインする場所は、海の底なのである。海底の深淵については、グリッサンが *Poetics of Reallion* (7-8) において、ウォルコットの言葉を巻頭に掲げながら詳述している。

グリッサンが海と言う時、奴隷貿易の現場となったカリブ海を指しているが、彼は、「海の深みに漂う原初の犠牲者」(同8)の深淵の経験こそ、共有しなければならない、と述べている。それでは、カリブの作家に限らず、アフリカ系の作家たちが共有する海底の犠牲者を、フォークナーは共有することができたのだろうか？

私は、『アブサロム』の研究書において、フォークナーが1920年代に執筆した短編においてすでに、アメリカという地理的境界を越えて、南米の港町などを舞台にし、海の底に横たわる夢を見る人物を一人ならず造型してきたことに注目した。とくに謎めいた短編「カルカソンヌ」(1926年執筆)の主人公、詩

人の分身/骸骨は、「骨は海の底に、海の洞窟に横たわり、消えゆく波の胼によって、他の骨と互いに骨をぶつけあいながら横たわっていることになろう」(Faulkner, *Collected Stories* 897) と想像している。この詩人の住処は、リンコンというスペイン語圏にある港町なので、彼が夢見る海は、メキシコ湾から続き大西洋へと広がるカリブ海と考えられる。

『アブサロム』において、クエンティンの祖父が語るハイチは、人間の貪欲がもたらす流血と悪魔的な欲望が集中する場所だが、それは「微笑しながらも、怒りを秘めて、信じられないほど真っ青な海のうえに作られた孤島」(Faulkner, *Absalom* 202) として描かれている。『アブサロム』の語りの中でも、このあたりの祖父コンプソンの想像力は、奴隷船で命を落としたアフリカの母や子供たちにも及んでいる。

呪われた船は、宿命から逃れる試みも虚しく、帆の最後の端切れが青い海に沈む、女や子供の最後の虚しい絶望の叫びが海の上でかき消されていった…… (同)

サトペンが解決したとされるハイチの農園労働者の反乱についても、祖父は詳細に語っている。ハイチの黒人によって包囲された屋敷内で、農園主一家とサトペンは、海の上を吹く風の音を聞いている。それは罪深い奴隷貿易の風の音だった。

外から何の助けも風すらも吹いて来ない、来るのは貿易風だけであり、あの同じ疲れ果てた風だけが島に吹いていたが、風は、殺された女や子供たちの疲れ果てた声を、ホームレスとなり墓もなく、一切から隔離され、淋しい海の上をさまよっている声を、今も背負って吹いていた…… (同204)

祖父コンプソンの想像力が痛ましく思い描いているように、多くのアフリカ人は奴隷貿易の犠牲になり、故郷から引き剥がされて故郷喪失者(ホームレス)となり、《中間航路》で死ぬか、海に生きたまま捨てられた。このように、ホー

ムレスとなり、墓も築いてもらえない、つまり生きたしるしを消されたアフリカ人の宿命について、フォークナーのもっとも保守的な人物に語らせているところに、私は南部作家フォークナーの罪意識と良心のかけらを読みとってあげたいと思っている。

ここまでサイドにもグリッサンにも教えられて論じてきたが、私たちがどのような作家や作品を研究するにせよ、個人を描いた作品のなかに、現在の世界の問題系を読みとり、歴史と記憶を読者に解き明かすこと、それが私たち研究を志す者に課せられた責任であり義務だと信じている。

\*本稿は、2010年度名古屋大学英文学会サマーセミナー（2010年7月16日）における講演に基づき、改稿したものである。

## 註

<sup>1</sup> たとえば、フォークナーの人種論で代表的な研究をしているエリック・サンドクイストに言わせるなら、クリスマスは、1930年代のアメリカ南部白人がつねに意識している「自分はひよっとしたら黒いかもしれない」という不安の象徴的人物だということになる（“*white within black within white*” [Sundquist 66]）。

<sup>2</sup> 「ジョイン (join)」という動詞は、『アブサロム、アブサロム！』でも用いられるが、後述するように、トニ・モリスンが『ピラヴィド』において、母と娘の認知に瞬間について用いている。

<sup>3</sup> Glissant, *Poetics* 巻頭にエピグラフとして引用されている。

## 引用文献

- Bhabha, Homi K. *The Location of Culture*. London: Routledge, 1994.  
Blotner, Joseph L. *Selected Letters of William Faulkner*. New York: Random House, 1977.  
Césaire, Aimé. *Cahier d'un retour au pays natal*. 1939. *Discours sur le colonialisme*. 1955. Paris: la Société nouvelle présence africaine, 1939, 1955.

- 砂野幸稔訳『帰郷ノート 植民地主義論』平凡社ライブラリー, 2004年。
- Cowley, Malcolm. "William Faulkner's Human Comedy." Ed. Malcolm Cowley. *The Faulkner-Cowley File: Letters and Memories, 1944-1962*. New York: Viking, 1966. pp. 8-13.
- Faulkner, William. *Absalom, Absalom!* 1936. The Corrected Text. 1986. New York: Vintage International, 1990.
- . *Collected Stories*. 1950. New York: Vintage International, 1995.
- . *Light in August*. 1932. New York: Vintage International, 1990.
- Glissant, Édouard. *Faulkner, Mississippi*. Paris: Editions Stock, 1996.
- . *Poetics of Relation*. Trans. Betsy Wing. Ann Arbor: U of Michigan P, 1997. Originally published as *Poétique de la relation* (Paris: Gallimard, 1990).
- Gwynn, Frederick L. and Joseph L. Blotner, eds. *Faulkner in the University*. 1959. Charlottesville: UP of Virginia. 1995.
- Morrison, Toni. *Beloved*. New York: Alfred A. Knopf, 1987.
- . *Paradise*. New York: Alfred A. Knopf, 1998.
- Said, Edward. *Reflections on Exile and Other Essays*. Cambridge, Mass: Harvard UP, 2000.
- 日本語訳は、大橋洋一、近藤弘幸、和田 唯、三原芳秋共訳『故国喪失についての省察』[1][2]（みすず書房、2006年、2009年）を参考にした。
- Sundquist, Eric J. *Faulkner: The House Divided*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1983.

## Synopsis

The Sea of “the World plus ‘I’”: Representation of Home  
in William Faulkner and Toni Morrison

Ikuko Fujihira

Édouard Glissant, notes that “Faulkner’s oeuvre will be complete when it is revisited and made vital by African-Americans” (Glissant, *Faulkner* 55), and highly appreciates the efforts of Toni Morrison. In 1944, in his letter to Malcolm Cowley, Faulkner confessed his ambitious dream as a writer to go beyond his predecessor, Thomas Wolfe, who “was trying to say everything, get everything, the world plus ‘I’ or filtered through ‘I’ or the effort of ‘I’ to embrace the world in which he was born ... into one volume” (Blotner, *Selected Letters* 185).

It was quite fortunate for Faulkner’s ambition to capture the world filtered through “I” that Glissant recognized Faulkner’s work as “*écho-mondé*” just like “Bob Marley’s song...the architecture of Chicago...the shantytowns of Rio or Caracas; Ezra Pound’s *Cantos*” or “the marching of schoolchildren in Soweto.”(Glissant, *Poetics of Relation* 93). This paper attempts to trace what Glissant calls the “*écho-mondé*” in Faulkner and Morrison’s novels, while we pursue the imaginary space of “creole,” errantry, borders, sea and home, represented in their novels.

In *Location of Culture*, Homi Bhabha argues the modern literature as “the literature of recognition,” by developing Franz Fanon’s desire for “a world of reciprocal recognitions”(quoted in Bhabha 8). Bhabha admires Toni Morrison’s *Beloved* just because the novel illustrates the writer’s “ethical and aesthetic project of ‘seeing inwardness from the outside’ furthest or deepest” and Morrison writes about a ghost “who should want to be realized” (*Ibid.*, 16). Sethe, the former slave woman, has to recognize the phantom shape of her dead daughter, when the ghost of *Beloved* comes back to the real world eighteen years after the mother killed her.

In this context, we can begin to consider the reason why Joe Christmas,

in Faulkner's *Light in August*, comes back to Jefferson, Mississippi, fifteen years after he leaves his foster home in the same state. Christmas, with his "parchment-colored" skin, can live as white in the North, or at least he passes as "white" even in other Southern cities, but he comes back to the small Mississippi city, as though he had known all those fifteen years that he was destined to be lynched there recognized as a black rapist.

In fact, Christmas keeps running the street for fifteen years to be "recognized" as someone, either white or black: "The street ran into Oklahoma and Missouri and as far south as Mexico and then back north to Chicago and Detroit and back south again and at last to Mississippi" (Faulkner, *Light in August* 224). Christmas "enlisted in the army, served four months and deserted and was never caught" (*Ibid.*). It seems to me that he simply wished to be recognized as somebody when he enlisted in the army and deserted, but nobody recognizes him even as a deserter.

After his murder of Joanna Burden in Jefferson, Christmas attacks a black church and assaults a man, apparently to be recognized as a black criminal. Back in Mottstown, Mississippi, in his flight from the posse of Joanna Burden's murder case, Christmas knows that the townspeople "recognized" (*Ibid.*, 337) him, but at the same time he notices that they would not capture him until the time comes "like the rule says" (*Ibid.*). When he is captured, Mrs. Hines recognizes him as her lost grandson, and the white supremacist Percy Grimm lynches him as a black man who raped and killed a white lady. As a consequence, we can safely assume that Christmas finally comes back home to be recognized as a black son of the Jim Crow South in early 1930s.

Consolata Sosa, in Morrison's *Paradise*, stolen and lost from a dingy city in South America, is found by her twin brother from Brazil, when she was killed at the Convent in Oklahoma. Dislocated from home for a long time, she had lost her language and culture from her native land, but the brother in his ethnic costume comfortably envelopes her in their common language and culture. Miraculously, she is peacefully embraced by the black pieta,

Piedade, on the shore of her home land.

Beloved probably comes back home from the bottom of the Caribbean Sea, where millions of the Africans lie down, unnoticed and unrecognized by anybody for hundreds of years. When Glissant uses Derek Walcott's famous line, "Sea is History," as epigraph to his *Poetics of Relation*, the sea means the bottom of the Caribbean Sea where the homeless children join their slave mothers, their sisters and brothers.

In Faulkner's *Absalom, Absalom!*, Quentin Compson's grandfather, in talking about Haiti where Thomas Sutpen goes to be rich, refers to the victimized mothers and children from Africa on the slave ships: "the doomed ships had fled in vain, out of which the last tatter of sail had sunk into the blue sea, along which the last vain despairing cry of woman or child had blown away" (Faulkner, *Absalom* 202).

As argued above, both Faulkner and Morrison represent the solitude and pain of the individual unhomed children as they journey back to their home, while displaying errantry, displacement, or dislocation in the modern world. Further, both writers see the ocean as a signified home for the lost children and mothers; the sea, locus of the crime of slavery and American history, becomes the topos of the writers' memory and conscience, eventually enabling their works to be the "écho-monde."